

---

# 日本図書館文化史研究会

## ニューズレター

第 87 号 2004 年 2 月 1 日

日本図書館文化史研究会

〒101-8301 千代田区神田駿河台 1-1  
明治大学司書・司書教諭課程  
郵便振替口座 00170-5-164973

(事務局)

小黒浩司

ファックス

電子メール [oguro@sakushin-u.ac.jp](mailto:oguro@sakushin-u.ac.jp)

---

### ■■ 目 次 ■■

2003 年度第 3 回研究例会のご案内	2
研究例会発表募集のお知らせ	
ヴォルフエンビュッテル図書館史・図書史・メディア史研究会	
第 13 回研究大会のご案内 (河井弘志)	4
紹介：帝国図書館の「問答板」のこと (小川 徹)	6
2003 年度第 2 回研究例会報告	8
『ニューズレター』原稿募集のお知らせ	
『図書館文化史研究』第 22 号原稿募集のお知らせ	
日本図書館文化史研究会 2004 年度研究集会・総会のご案内	11
日本図書館文化史研究会 2004 年度研究集会個人発表募集のお知らせ	11
日本図書館文化史研究会創立 25 周年事業について	12
会費納入のお願い	
運営委員会通信	13
事務局だより	14
会員動向	

## 2003 年度第 3 回研究例会のご案内

大阪府立中之島図書館は、本年創立百周年を迎えました。本研究会では、記念事業のひとつである展示「この街と100年 大阪府立中之島図書館」の開催時期にあわせて、2003 年度第 3 回研究例会を開催し、同時に中之島図書館の見学会を行うことにしました。

ご承知のように、1904 年建設の中之島図書館は国の重要文化財に指定されていますが、例会会場である隣接する中央公会堂も、1918 年完成のネオルネッサンス様式の名建築です。多くの方々のご参加を期待します。

### 記

- 日 時 2004 年 3 月 6 日(土) 14 時～16 時 30 分
- 場 所 大阪府立中之島図書館・大阪市中央公会堂
- 時 程 14:00-15:00 研究発表(公会堂地階第 1 会議室)  
15:30-16:30 中之島図書館見学

※ 中之島図書館での記念展示(於:3 階文芸ホール)は、研究例会の前後に各自で参観してください。なお、例会当日の開館時間は午前 9 時～午後 5 時です。

- 参加費 500 円
- 申込方法 参加ご希望の方は、本研究会事務局へ、葉書、ファックス、または電子メールでお申し込みください。
- 申込締切 2 月 28 日(必着) でお願ひします。

#### ○ 内 容

#### ● 発表者

平野 翠(中之島図書館大阪資料室室長)

#### ● 発表題名

大阪図書館草創期寄贈書

#### ● 発表要旨

明治 37(1904)年 3 月に大阪図書館(現大阪府立中之島図書館)は開館した。その開設準備室が発足する以前より、寄贈図書が相次いだ。寄贈者は、明治 35 年 11 月「陸軍第四師団清国天津駐屯大隊」を始め新聞社、出版社、書店、財界人、蔵書家、文化人、学者、個人篤志家など多士済々で、開館 10 年後の大正 3(1914)年には、蔵書のうち三分の一は寄贈書によるものであった。しかも、その寄贈内容は、古書肆鹿田静七氏「正平版論語」に代表されるような和漢洋の古典籍が大半を占めていた。このことは、当時の人々が、「大阪図書館」を府県立図書館という範疇以上のものとして期待していた頭れであり、その根底には近世以来の大阪文化の流れがあった。

会場案内

研究例会発表募集のお知らせ

本研究会では、毎年度3回（6月頃、12月頃、3月頃）に研究例会を実施しています。研究例会での発表を希望される方は、次の各項を明記して、別記の事務局までお申し込みください。

- 氏名（所属）
- 連絡先（住所、電話、メールアドレス等）
- 発表題目
- 発表要旨（200字程度）
- 発表時間（通常質疑応答を含め1件1時間程度）
- 発表希望場所（例：関東、関西）

## ヴォルフエンビュッテル図書館史・図書史・メディア史研究会

### 第 13 回研究大会のご案内

ヴォルフエンビュッテル図書館史・図書史・メディア史研究会はドイツを代表する図書館史の学会で、毎年、壮麗なバロック様式のアウグスト大公図書館で、年次研究大会を開催しています。秋にも研究大会を行うことがあります。ドイツの代表的な図書館史研究者が参加します。今年は発表者のなかに外国人の名がみられません。毎年、何名かのヨーロッパの図書館史研究者も参加し、発表しています。ヴォドセク会長（Peter Vodosek）から、日本の図書館史研究者も、この研究大会のプログラムを知ってほしい、との希望がありましたので、翻訳してご紹介します。ゲーテが「麗しの 5 月」と呼んだといわれる、ドイツで最も爽快な時候ですので、美しいヴォルフエンビュッテルの町の見物をおかねて、参加されるといいでしょう。

(河井 弘志)

- 日 時 2004 年 5 月 10-12 日
- 場 所 ヴォルフエンビュッテル・アウグスト大公図書館
- テーマ 20 世紀 70-80 年代：情報社会への道
- 司 会 Dr. ペーター・ヴォドセク教授（シュトゥットガルト）  
Dr. ヴェルナー・アルノルト（ヴォルフエンビュッテル）

戦争直後から冷戦の時代が終わって、2000 年代にはいと、1960 年代以後の図書館の歴史が歴史家たちの視野にはいつてきた。この時代が図書館にとってもひとつの転換のメルクマールを意味するという点では、今日では大方の意見が一致している。68 年運動に発するとまでは言わないにしても、その影響を受けた社会変動は、教育全体のみならず、図書館にたいしても影響を及ぼした。

2001 年にスウェーデンのボロースではじめて開催された国際会議では「ユートピア思想と社会的抵抗の時代の図書館—1960 年代後半と 1970 年代の図書館」というテーマがとりあげられた。つづく 2002 年には、一国レベルで、「赤旗の下の図書館情報学 — フィンランドの図書館学教育・図書館学研究における急進主義の時代」というテーマのシンポジウムが、フィンランドのタンペレで開催された。

これに刺激されて、ヴォルフエンビュッテル図書館史研究会は、ドイツにふさわしい形の今回のテーマを取り上げ、それをもって、1988 年のテーマ「国家社会主義時代」、1990 年のテーマ「1945-1965 年時代」で始まった現代史的なテーマのもとで行われた一連の年次研究大会のしめくくりとすることにした。

- 「1969 年図書館計画」と「1973 年図書館計画」— 要求と実現

- Dr. コンラート・ウムラウフ教授 (ベルリン・フンボルト大学)
- 1974 年以降のドイツ連邦政府の情報ドキュメンテーション計画  
Dr. ハンス・クリストフ・ホボーム教授 (ポツダム専門大学)
  - 新設大学図書館 — 成功モデルとなったか？  
Dr. ウーヴェ・ヨーフム (コンスタンツ大学図書館)
  - 新しい図書館類型の出現 — 専門大学図書館  
Dr. ラインハルト・アルテンヘーナー (ドイツ図書館, フランクフルト/M)
  - 図書館の 68 年世代 — 新しいコンセプト  
ヴォルフラム・ヘニング教授 (シュトゥットガルト・メディア大学)
  - 多様から統一へ — ドイツ図書館会議からドイツ図書館団体全国連合体へ  
ビルギート・ダンケルト教授 (ハンブルク応用科学大学)
  - 親方教育から専門大学へ — 養成教育の新しい道  
Dr. ペーター・ヴォドセク教授 (シュトゥットガルト・メディア大学)
  - 広域図書館の新しい任務  
Dr. ヴェルナー・アルノルト (ヴォルフエンビュッテル・アウグスト大公図書館)
  - 総合目録からオンライン連合目録へ  
Dr. ロナルト・M・シュミット (ケルン・専門大学図書館センター)
  - コンピュータの凱進行進 — 図書館の革命か？  
Dr. ジークフリート・シュミット教授 (ケルン大司教区・大聖堂図書館)
  - 1973 年の市町村連合の行政簡素化勧告「公共図書館」 — 公共図書館近代化の推進力となったか？  
ギュンター・バイエルスドルフ教授 (ベルリン)
  - バーデン・ヴュルテンベルク州図書館計画 — 学術図書館総合計画 (1973) — 要求と現実  
Dr. エルマー・ミットラー教授 (ゲッティンゲン・ニーダーザクセン州立大学図書館)

**ご案内**

研究発表は、ヴォルフエンビュッテル・アウグスト大公図書館 Bibliotheca Augusta でおこなわれます。申し込みは下記にお願いします。

Herzog August Bibliothek, z. H. Dr. Werner Arnold  
Lessingplatz 1, D-38300 Wolfenbüttel あるいは  
Postfach 13 64, D-38299 Wolfenbüttel  
Tel: ; Fax:  
Email:

宿泊所の予約は、下記に申し込んでください。

Tourist-Information,  
Stadtmarkt 6, D-38300 Wolfenbüttel  
Tel: ; Fax:

## 紹介：帝国図書館の「問答板」のこと

小川 徹

明治期の風俗をうかがう上で貴重な『風俗画報』には図書館に関する記事がわずかながら見える。東京図書館（131号）、帝国図書館（218号）に関するものは興味深いものである。ここでは後者：218号（明治33年10月10日発行）の「帝国図書館に就きて」という一文に見えるひとつの事を見てみたい。挿絵を参照しながら筆者は当時の帝国図書館を案内している。挿絵には閲覧室、新聞閲覧台、投書函などとともに「問答板」と云うのがある（次ページ図参照）。場所は不明だが壁面に掛けられていたものようである。その板の右端に縦書きで、

学芸参考若くは著述上或る一事を調査せんと欲するに其何れの書に就かば之を亮知するを得べきや。其搜索人中互に質問する方法を設く故に質問せんとする者は出納所に申出で質問用紙を受取て其の疑問を記し此処へ挿むべし、又閲覧者中其質問の事に就き書名等承知の者は質問用紙答の部に其答を記載ありたし

と書かれていたと記事に見える（句読点は引用者。次の引用文も同じ）。

この文章の横にクリップ様のものがいくつか並んで付いており、これに縦長の質問用紙が何枚も挟んで下げてある様子がみえる。利用者の質問に他の利用者が答えるのである。面白い。レファレンスサービスとは違う。これに先立って行われていたかと思われるが、どこかにモデルがあったのであろうか。

『教育雑誌』第80号（明治11年10月25日）に在米国留学生監督、目賀田種太郎による「監督雑報12」があり、「書籍館ノ事」を記していて、その記事の最後にケンブリッジ、ハーバルト大学書籍館で行われていることとして、

同上ノ書籍館ニ於テ特ニ便利ナルモノハ諸款ノ質問ニ答フルノ方法ナリ。例ヘバ人アリテ或事ヲ質問セント欲セバ之ヲ質問書ニ記シテ館中ニ掲グベシ。而シテ館中ノ諸人其答ヲ爲サント欲スル者アレバ之ニ其答弁ヲ記入ス。又質問者ハ其姓名ヲ記シ或ハ預メ書籍館ニ取り置キタル姓名ニ対スル番号ヲ記スルガ故ニ其姓名又ハ番号ニ由リテ書籍館ニ紹介シ或ハ直ニ其答弁者ニ紹介スルノ便益ヲ与フルコト有ルガ如シ。

とあるのがそうであろう。しかし帝国図書館（あるいはその前身の東京図書館？）はこの記事を知って「問答板」を採用したとするより、田中稲城が直接欧米でえた知識に基づいて導入したと見るほうが妥当ではあるまいか。

ただ『教育雑誌』第80号の記事を取り上げている竹林熊彦は「問答板」に言及していない(1)。帝国図書館における参考事務について詳細に検討された稲村徹元氏の論文(3)もそのことに触れておられない。明治期の「レファレンス・ワーク」について広く資料にあたっておられる北原論文(2)も目加田の上記記事に注意はされているが、「問答板」には及んでいない。近年の金津論文(5)も、明治期大学図書館の場合について調べられた阪田論文(4)も触れておられない。「問答板」に関する

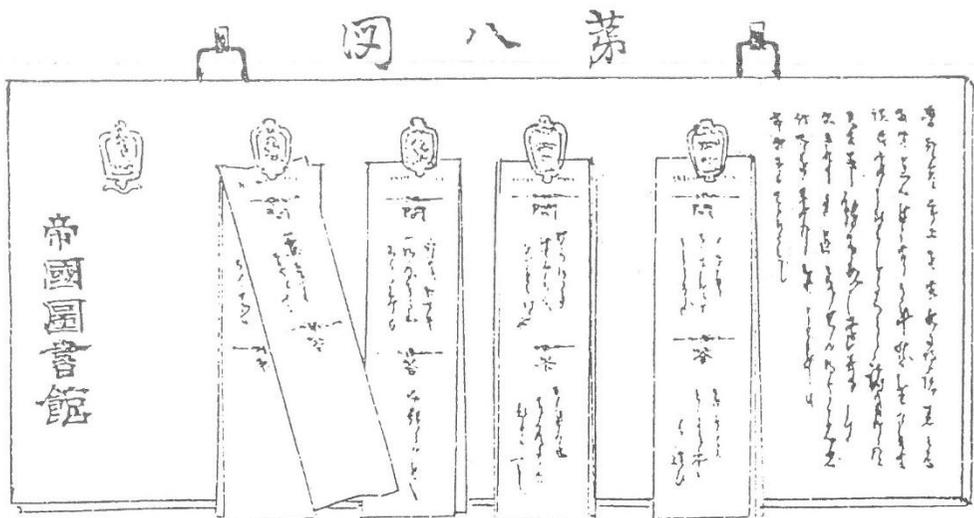
る記録なりは図書館関係の文献に何故見えないのであろうか。「問答板」は確かにレファレンス・サービスそのものではない。早く帝国図書館から姿を消し、だれもこれについて語ることがなかったという事情があったために図書館界で話題にならなかったのであろうか。レファレンス・サービス（の歴史）にうとい私故これ以上のいい加減なもの云いは止めにして、「問答板」の記事の紹介にとどめたい。

どなたかいろいろお教えいただければ幸いです。「問答板」現在版と言うわけではありませんが。

なお、本稿をまとめるうえで奥泉和久氏から貴重な示唆をいただきました。記してお礼にかえます。

注

- (1) 竹林熊彦「明治初年ノ圖書事業小観」『圖書研究』（青年図書館員聯盟機関誌）V.6-4(1933)。竹林はその著『近世日本文庫史』（1943）の見返しに『風俗画報』131号所載の（と思われる）東京図書館閲覧室の挿絵を使っているので、「問答板」の記事を載せている 218 号にも目を通していていると思われるのだが、管見の限りでは竹林にこれに触れた、そして目加田の記事と重ねてみる論文なりはない。ただ精査してはいないのでもれがあるかもしれない。
- (2) 北原圀彦「明治・大正期におけるレファレンス・ワークの発展」『Library and Information Science』no.8(1970)
- (3) 稲村徹元「戦前期における参考事務のあゆみと帝国図書館」『参考書誌研究』第3号(1971)
- (4) 阪田蓉子「わが国の大学図書館におけるレファレンス・サービスの発展」『現代レファレンス・サービスの諸相』日外アソシエーツ、1993
- (5) 金津有紀子「戦前におけるレファレンス・ワークの導入」『Library and Information Science』no.44(2000)



## 2003 年度第 2 回研究例会報告

実施日：2003 年 11 月 29 日

会 場：東京学芸大学

第 2 回研究例会は 11 月 29 日（土）14 時から 16 時過ぎまで、『『図書館情報大学同窓会橘会八十年記念誌』編集を了えて』（平成 14 年 9 月）と題して、寺田光孝が報告を行い、これに対し山口源治郎が全体的なコメントを行い、その後討議を行った。出席者は 11 名であった。

寺田の報告の概要は以下のとおりである。

まず、図書館情報大学同窓会の『八十年記念誌』発行の経緯と本誌の特徴について述べた。図書館情報大学はおよそ 20 年の周期で変遷を繰り返し、筑波大学との統合に至っているが、教習所・講習所は「長期講習形式」の形であり、戦後の図書館職員養成所も各種学校にとどまっているため、正式文書が保存されておらず資料が乏しいこと、修了生・卒業生のデータ編が本誌の特徴となっていること、歴史の記述は略史・稗史として限定的に記述していること、などである。

次に、歴史記述の部分であるが、戦前の教習所・講習所、戦後の養成所、図書館短大時代、図書館情報時代について、それぞれの性格並びにそれらがもつ問題点に絞り、述べた。

戦前の教習所・講習所時代については、まず第一に、(1) 日本図書館協会と乗杉の合作で教習所の設立を見たが、教習所は「常設の施設をもたない長期講習形式」で始まっており、主管は文部省であるが帝国図書館長が管理者という二重体制にあり、一元的な教育体制になっていなかったこと。(2) 出発当初から帝国図書館長の後任問題が生じ、乗杉・松本ラインと和田萬吉はじめ講師陣や修了生の間に乖離が生じ、昭和 6 年の「学友会」による同窓会分裂事件にも尾を引いていること。(3) 講習所の責任者松本喜一は「松下村塾」塾長的な機能を果たし、一流講師招聘の功績を有すると同時に、松本は大正デモクラシーの終焉に向かう時代性を負う個性をもっていたこと。(4) 教習所が男女共学で出発するなど大正デモクラシーの風潮から生まれながらも、時代は大正 12 年の関東大震災、昭和 6 年の満州事変など大正デモクラシーの終焉に向かっておおきく変化するが、教習所・講習所はこうしたギャップ、あるいは転移する時代性を当初より乗杉・松本体制のうちに内在させていたと解釈できること。(5) さらに、大正から昭和前期への時代変化は大正デモクラシーの外因からの蹉跌と捉えるか、大正デモクラシーそのものの帰結とみなすかの歴史問題が横たわっている。以上のことから、教習所・講習所における松本喜一の位置づけについては避けることができず、苦慮したが、松本の評価は読者に委ねるとして評価を避けざるを得なかった、と述べた。

第二点としては、昭和 16 年の規則改正とその翌年度からの授業科目の変化が注目されること、そして、これはある意味では戦後を先取りするものとして積極的

な評価を与えたこと。すなわち、戦時下でありながらも、これまでの蓄積とアメリカモデルによる手直しを積極的に図り、貸出文庫、読書指導、児童図書館運営法、図書館参考事務などの科目の新設が図られていることである。

養成所の時代は、未詳の部分が少なからずあるものの、舟木所長の初期の時代と伊東所長の時代に時代区分することができること。(1) 舟木所長の時代には、早世により形をなさずに終わったが、図書館学に対して司書養成の実学教育でありながらも理論志向の可能性があったかもしれないという可能性に言及した。また、授業科目で見る限り、GHQ の影響は薄いのではないかと指摘がなされた。

(2) 伊東所長時代は実学に徹し、図書館界とも密接な関係を有し、*librarianship* の教育が行われていたこと、したがってまた就職に関しては黄金期と云ってもよいことが指摘された。反面、外部での図書館学への動きに対する反映や自省は明確な形をとらず、図書館学の形成の意欲は見られずに終わったのではないかとした。

図書館短期大学の時代は 17 年間に要したものの、4 年制への移行期であり、図書館学に取り組む姿勢においても、過渡期の性格が強いこと、特に (1) 図書館科で始まり図書館学科へ名称変更をしているように図書館学の形成の点では短大の時代が一番苦闘した形勢が見られることが指摘された。また、それに対して学内外の批判も厳しくなされた点も強調された。学生の批判は図書館学に原論がないこと、同窓生による批判は、*librarianship* 教育が抜け落ちたとの批判である。後者に対しては、世田谷移転に伴う図書館界との乖離や学校教育としての自足の面もあり、学生の意識も卒業後即管理者または将来管理者になるというより、就職口としての図書館員志向に変わっていたこと、こうした背景もあつたのではないかと推測が述べられた。(2) 昭和 44 年図書館機械化の科目(別科)の新設、翌 45 年コンピュータ導入、46 年文献情報学科の新設と検索法、電算機プログラミングの科目の新設など、社会変化にまだ直結はしていないもののコンピュータの影響が徐々に見られるようになる。コンピュータの蔭、また日本社会の大きく変化したこの時代は、司書養成だけの時代は終わっており、その意味でも過渡的性格が濃いことが述べられた。

図書館情報大学の時代は、図書館学と情報(科)学の融合が最大の課題であり、大学院教育が今後の課題である点のみが指摘された。

以上の発表に対して、山口源治郎による総括的なコメントがなされた。(1) 全体的な感想としては、①一大学史を超えて、我が国図書館養成史の通史のおもむきが見られること、②会員略歴・消息の記述は充実していること、③但し、橘会そのものの動き、役割の記述が薄いこと、④資料の点に関し、日本社会で *archives* に対する認識が低いこと、新資料の発掘に期待したがないものねだりに終わったことの指摘があり、さらに (2) 個別の問題として、①教習所の設立と大正デモクラシーの関係、②松本喜一帝国図書館長の評価、③戦後改革と図書館員養成、図書館学教育の体制(短大及び図情大)、④図書館員養成教育と図書館学研究の今後、の問題点について詳細なコメントが行われた。特に、(2) の①及び②に関し、大

正デモクラシーのなかで社会教育の変換の問題があること、すなわち、これまで内務省が所管としてきた社会教育の領域を文部省が取り込もうとし、文部省と内務省の対立の動きのなかで、乗杉・川本・権田らの社会教育の理論化が積極的に図られていることが重要であり、松本問題はイデオロギーの側面のみならず、この観点からも再検討すべきとの指摘がなされた。③に関しては、図書館法 5 条の関連や図書館学研究大学としての東大・京大の図書館学講座開設に、図書館学の研究機関と司書養成機関の分離策があったのではないかとの仮説が示された。

以上、山口の指摘は新鮮かつ鋭い視点として、今後の検討課題になるであろう。

小川徹は図書館学に関し、日本での図書館の発展に関し、図書館普及の量的問題（蔵書や利用者など）、すなわち社会科学の対象となりうる成熟度の問題があることを指摘した。その他、日本における archives に対する意識の問題や、戦後のアメリカモデルの受容、単科大学の在り様などについての活発な討議があり散会した。

(文中敬称略。文責寺田光孝)

### 『ニューズレター』原稿募集のお知らせ

ニューズレターの原稿を常時受け付けています。

次号（88号）掲載を希望される場合、3月末日までに別記事務局まで原稿をご送付ください。

今後ニューズレターで、図書館文化史研究に関わる文献・情報を速報していきたいと思えます。会員・非会員の問わず、関連業績を事務局までご連絡ください。皆様のご協力をお願いします。

### 『図書館文化史研究』第22号原稿募集のお知らせ

機関誌『図書館文化史研究』第22号の原稿を募集します。

原稿の締切は2004年12月末日です。ふるってご投稿ください。

なお、この件に関するお問い合わせ、ならびに原稿の送付先は別記事務局までお願いします。

## 日本図書館文化史研究会 2004 年度研究集会・総会のご案内

2004 年度日本図書館文化史研究会研究集会・総会を、おおむね下記のように開催することになりました。多くの方のご参加を期待します。

なお、内容等の詳細については、次号以降のニューズレターで、お知らせします。

### 記

- 日 程 2004 年 9 月 11 日 (土)・12 日 (日)  
第 1 日：未定 (京都精華大学図書館見学会、懇親会等を予定しています)  
第 2 日：個人発表・総会
- 場 所 京都精華大学  
京阪電鉄出町柳駅から叡山電車に乗り換え、京都精華大前駅下車  
<http://www.kyoto-seika.ac.jp/annai/index.htm>
- 参加費 会員 1,000 円程度・非会員 1,500 円程度を予定

## 日本図書館文化史研究会 2004 年度研究集会個人発表募集のお知らせ

上記研究集会・第 2 日 (9 月 12 日) での個人発表を希望される方は、次の各項を明記して、別記事務局までお申し込みください。

発表時間は質疑応答を含めて 1 件 1 時間程度を予定しています。

- 氏名 (所属)
- 連絡先 (住所、電話、メールアドレス等)
- 発表題目
- 発表要旨 (200 字程度)

## 日本図書館文化史研究会創立 25 周年事業について

1982年に発足した本研究会は、2002年に創立20周年を迎えました。研究会では、これを記念する事業を実施することになり、1996年度よりそのための特別会計を組み、積み立てを行いました。積立金は2002年3月末で75万円となりました。

2002年度、研究会はこの積立金を一般会計に繰り入れて、20周年記念研究集会等の種々の記念事業を実施しましたが、その結果多額の繰越金が発生しました。その金額は771,681円となっています。

事務局ではその処理について、あらためて特別会計を組み、上記繰越金のうち60万円を繰り入れるという予算案を本年度の会員総会に提案しました。しかし総会での討議の結果、特別会計は組まずに一般会計の予備費とし、その用途等について今後運営委員会で協議し、来年度の会員総会にあらためて提案することになりました。

運営委員会はこの総会での議決を受け、予備費の用途等について検討を行いました。そして運営委員会では、この予備費にさらに積み立てを加えて、創立25周年記念事業を実施するのが至当ではないかとの結論に達しました。

そこで会員の皆さまに、25周年事業を行うことの是非、またかりに25周年事業を行う場合その具体案について、ご意見、ご提案をいただき、さらに検討を加えた上で、来年度の会員総会に最終案を提起したいと思えます。

なお、25周年は2007年となります。また、運営委員会での議論の過程では、図書館史に関する資料集の刊行、『ニューズレター』の復刻等の事業案が出されました。

会員の皆様の、ご意見、ご提案等は別記事務局までお願いします。

### 会費納入のお願い

2003年度会費をまだ納入されていない方には、封筒に「会費振替用紙在中」の朱印を捺し、振替用紙と会費納入のお願いの文書を同封しました。至急ご送金ください。年会費は3,000円です。

## 運営委員会通信

### ■ ■ 次回運営委員会のお知らせ ■ ■

次回運営委員会を、下記のように開催します。本研究会の運営に興味・関心のある方は、是非ともご参加ください。

当日ご都合の悪い方は、別記事務局まで郵便、ファックス、または電子メールで、ご意見、ご希望等をお寄せいただければ、運営委員会で検討いたします。

### 記

- 日 時 3月6日(土) 13時～14時
- 場 所 大阪市中央公会堂地階第1会議室
- 内 容
  1. 2003年度決算について
  2. 2004年度の事業・予算について
  3. 『図書館文化史研究』第21号について
  4. 2004年度第1回研究例会について
  5. 2004年度研究集会について
  6. 25周年記念事業について

ほか

### ■ ■ 前回運営委員会の報告 ■ ■

実施日：2003年11月29日  
場 所：東京学芸大学

以下のような事項について、協議しました。

1. 2003年度研究集会報告
2. 2003年度第3回研究例会について
3. 2004年度研究集会について
4. 『図書館文化史研究』第21号について
5. 『ニューズレター』第87号について
6. 2003年度予算繰越金について
7. 会員動向
8. 次回運営委員会について

## 事務局だより

### ■■ 会員動向 ■■

新入会

転居・所属変更

住所表示変更

メールアドレス変更

退 会